The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「ディスコミュニケーション(お互いに通じ合えないこと、)の諸相(いろいろ)」
Author(s)	西川, 勝
Citation	Communication-Design. 2010, 3, p. 32-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4748
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「お互いに通じ合えないこと、ディスコミュニケーションの諸相（いろいろ）」

西川勝

西川勝｜Masaru Nishikawa
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター　特任准教授

看護師として、精神科看護、血液透析看護、高齢者介護、認知症介護に従事してきた。臨床看護の哲学的転回を目指して、臨床哲学を学ぶ。CSCDでは「ディスコミュニケーションの理論と実践」の授業を担当してきた。

子どもの頃、夏休みの宿題に日記を書けというのがあった。怠け者のぼくは、毎日書く面倒な日記など嫌だった。でも、夏休みが終わりに近づくと、仕方なしに宿題をしたこともある。思い出をたどりながらのまとめ書きである。当然、嘘も混じっていた。しかし、薄らぐ記憶を文章にすると、自分の嘘と本当が混じってしまうのが不思議だった。語ることは騙ること、語る自分はある種のフィクションの上にしか存在し得ない。幾度も語り直し、自分を騙りの渦に巻き込まなければ、人は自分という存在に安心できないのかもしれない。

本稿の目的は、CSCDのメンバーとして、ぼくの5年間の活動を振り返るというものだが、何かを語れば、何かが隠される。コミュニケーションが根源的に抱え込まざるを得ないディスコミュニケーションの諸相について、その幾ばくかについて語るという、伝えられないことを伝えようとするそれ自身矛盾した行為は、切れ切れの裂け目からしか向こうは見えないかもしれない。

まずはタイトルについて

本稿のタイトルには、ルビが振ってある。「でぃすこみゅにけーしょんのしょそう」と読むのが普通だろうが、「おたがいにつうじあえないことのいろいろ」と読んでほしいという訳だ。ほんとうは、それほど深い考えがあってつけたルビではない。タイトルを見た途端に軽いショックを読者に与えたいという著者の下心を見抜かれた方も多いに違いない。ふとした思いつきでルビを使ってみたのだが、よく考えてみると、ルビにはコミュニケーションの問題系が絡んでいることに気がついた。要は分かりにくい言葉を分かりやすくするための工夫がルビなのだ。和製英語の「ディスコミュニケーション」に「お互いに通じ合えないこと」という意味を与え、「諸相」という漢字に「しょそう」という一般的な音読みの代わりに、もっと意味の分かる「いろいろ」という振り仮名をつけてみたのだ。ルビを振ることには、読み手に対する親切とお節介が

共在する。このタイトルのルビについても、そのことは同様にある。読者が、もっとましなルビを考えてみようとするならば、このルビの効果は最大限に発揮されたことになるはずだ。

そもそも、ディスコミュニケーションは和製英語であり、discommunicationを英和辞典で調べても見つかりはしない。なぜ、このような和製英語ができたのかはよく知らないが、いまではかなりの広がりを見せている言葉である。日本の文化を考えるときに、よく話題にされるのが外国からの輸入文化の影響であり、ディスコミュニケーションという和製英語なども、そのひとつの結果といえるだろう。だいたいcommunicationという英語も和訳が一つに定まらないから、その否定の意味を持つであろう「ディスコミュニケーション」の意味も不確定にならざるを得ない。意味が不確定な考えを外来語に当てはめて、一部の人間だけが、さも分かったようにその言葉を使い、それを分からないところが高邁深遠だと感じてありがたがるのは、現代日本の大衆的感性なのかもしれない。

中国から入ってきた漢字の読み方は長い受容の歴史の中で、複数の音読みに複数の訓読みが加わって複雑怪奇をきわめる。漢字は視覚的な文字でもあるので声に出して読めなくても、その意味は薄ぼんやりと分かることもあるが、声に出さないと落ち着かないのが人の常だから、ルビというようなしゃれた呼び方がなかった昔から、漢字には小さな文字で振り仮名がつけられていることが多かった。さらに現在のように漢字制限が公的に行われる以前、新聞や本などの出版物にはルビがついているものが多かった。総ルビなどという気前の良い文章ならば、仮名さえ読めればどんな難文でも声に出して読めるものだった。子どもでも仮名さえ読めれば、大人のために書かれたルビつきの文章を読むことができたわけだ。まだ十分な教育を受けていない子どもでも、ルビというある意味では押しつけの読み方を助けとして、漢字に関する知識不足を克服することができた。いまの子どもよりは容易に大人の世界に参入することができたのである。

日本語を母語としない外国人にとってもルビが果たす学習上の効果は大きいだろう。ルビを目にすることが少なくなった現在は、漢字が一部の人をディスコミュニケーションに追いやっている。ルビと漢字の複合的な意味の合成が生み出す豊かな文化をもう一度取り戻す術はないだろうか。と、余談が過ぎてしまった。ぼくの授業はいつもこんな感じではじまってしまう。対話でない独白体の講義は、相手の都合を無

視して曲がりくねっていく。

なぜ、ディスコミュニケーションを考えるのか

20数年間をナースとして働いてきたぼくは、コミュニケーションということばを嫌というほど見聞きしていた。「人を相手とする仕事、なかでも苦しみにあえぐ人に寄り添おうとする看護には、なによりもコミュニケーションが大事だ」と、繰り返し、繰り返し、学校でも現場でもたたき込まれた。疑問や反論を考える余裕さえなかった。しかし、実際に経験するのは美しいイメージで語られるコミュニケーションとは遠く隔たったディスコミュニケーションの連続だった。精神科閉鎖病棟、人工血液透析、高齢者介護、認知症介護、どの臨床現場も、ぼくにとっては分からないこと、通じ合えないことであふれかえっていた。だから、コミュニケーションということばが、ぼくは苦手だった。

ナースのぼくにとって患者だけがコミュニケーションの相手ではなかった。他の職種の人たち、患者の家族たち、地域の人たち。あるひとりの人の病気や、暮らしの不自由にまつわる人々は、普通に想像するより遙かに多い。看護という仕事をまじめに考えれば考えるほど、自分の立ち位置が患者を前にして右に左に揺れ動き、どっちつかずの中途半端なものになってしまうのだ。当然、安定したコミュニケーションの世界からははじき出されてしまう。それでも、ナースぐらいは右往左往したほうがいいと思っていた。患者を理解するというのは見果てぬ夢であり、それは諦めなければならない。そして、覚めた混乱と対立のなかで、手探りの新しい関係をつかむことが看護の実践力だと、やっとの思いを定めてきたのだ。

自分自身が恐怖の謎となってしまう病の体験は、患者を生きることの問いへと引き戻す。誰にも容易には答えられない問い、答えがあるかさえも判然としない問いの前で、生き続ける人、その人の問いに巻き込まれずには看護はない。しかし同じ問いをナースが問うわけでは

ない。苦しみを前にすることの苦しみ、届かぬ声を聴こうとする自らをなかば嘲り、なかば励まして居続けること、どうしても相手にたどり着けない場からの問いにナースは直面する。小手先のコミュニケーション技術ではなく、根源的なディスコミュニケーション状況を生きることを問わずにはいられない。ディスコミュニケーションに意味がないとすれば、自分の現実態を否定することになってしまう。臨床現場ではコミュニケーションの意味よりもディスコミュニケーションの意味を探求する方が、より切迫した課題であった。ナースは分かる患者よりも分からない患者、何かしてあげられる患者よりも何もしてあげられない患者の側を離れてはいけないからだ。「分かりました」は、患者のもとを去るときのナースのことばだ。

そのぼくがCSCDの特任教員になったのだから、人生はわからない。自分の名刺にコミュニケーションという文字を見たおかげで、なぜコミュニケーションということばが苦手なのかを、改めて考えてみる羽目になった。そして、自分の方向を、ディスコミュニケーションの創造性を解明することに決めた。

ぼくは掃除機の○○です。

奇妙な自己紹介

2006年度集中講義として、「ディスコミュニケーションの理論と実践」を担当した。教員として人前に立つのは初めてのことで、えらく緊張していたのを覚えている。

「皆さん、今日から始まるディスコミュニケーションの授業ですが、最初に自己紹介をしてもらいたいと思います。少し変わった方法ですが、がんばってください。表現しにくい事柄を、どうやって上手く伝えるか、

これが課題です。それでは始めます。自分のことを家電製品にたとえて自己紹介してください。その理由も一緒にお願いします。例えばこんなふうに。ぼくはレコードプレーヤの西川です。短いときは5分くらい、長くても30分くらいしか一度には話ができません。いいたとえではありませんが、皆さんも、さあ、どうぞ」

ぼくの出した課題に、受講生は頭をひねりながら素敵な自己紹介が続いた。「ぼくは掃除機の〇〇です。何でも吸い込もうとフル回転です」「わたしは電気ポットの〇〇です。熱くなるのに時間がかかります。でも冷めにくいです」など。ユーモアのある発言が続いて、良い感じのアイスブレーキングのようだった。

実は、教員のぼくには企みがあった。誰かひとりでも受講生が、ぼくの予想を裏切る答えをしたら、すべては水の泡になる。ひやひやした思いで最後の答えを待っていた。思い通りの結果だった。受講生は悩みながらも、全員が自分を家電製品にたとえて自己紹介をした。

「みんな、とても面白い自己紹介でした。家電製品で自分のことを紹介するなんて、無茶な課題をクリアするのはすごいですね。さて、ディスコミュニケーションの背景に何があるのかについて、少しお話したいと思います」

この授業のために、ある論文[*1]を読んできたぼくは、次の4行を板書した。

*1
栗原孝(2003)「歪められたコミュニケーションとコミュニケーションの隠れた次元」『亜細亜大学国際関係紀要』12(3):43–72。

1. 知らない
2. 理解できない
3. 同意できない
4. 歪められたコミュニケーション

ディスコミュニケーションは、コミュニケーションの不全を意味する。コミュニケーションの機能を、伝達・理解・共有という側面から考えると、コミュニケーション不全を引きおこす原因もしくは背景には、「知らない」「理解できない」「同意できない」の3つが考えられる。

1.「知らない」というのは、コミュニケーションの回路が結ばれていないことを意味する。知らない言葉で話しかけられてもコミュニケーションは成り立たない。

2.「理解できない」というのは、メッセージは分かっても、それが何を意味するのかが理解できない場合である。「家にはいるとき、靴を

脱いでください」と言われても、その習慣がなく、その習慣の意味も知らなければ、どういう意味で言われているのか理解できない。下手をすると靴を盗られると誤解してしまう。

3.「同意できない」は、メッセージの内容を文脈も含めて理解できても、意見が異なる場合に生ずる。同じ言語文化圏にいる場合には1や2は少ないが、3は数多く存在する事態である。

ここまで説明して、4.「歪められたコミュニケーション」を説明する際に、授業の最初に行った奇妙な自己紹介を例に出した。教室という場では、黒板を前にする者と背にする者の間には、役割の違う関係が存在している。「電化製品に自分をたとえる」という課題が、はたして答えるに値する問いであるかどうか、たとえによる自己紹介には電化製品ではなく動物の方が良いという考えが生まれる余地はないのか、といった批判的な考えが抑圧排除される力が、教室のコミュニケーションにはある。一見、和やかに受け答えしているかに見えて、答える者の自由が奪われた「歪められたコミュニケーション」が現れている。そしてそのことに、なかなか当事者も気づくことはできない。伝達・理解・共有の、共有が外的・内的な圧力によって強制されている場合、コミュニケーションは暴力性を帯びてしまうことがある。このような「歪められたコミュニケーション」の暴力性に対抗するには、意識的なディスコミュニケーションを引きおこす必要がある。ディスコミュニケーションはコミュニケーションの不全というマイナス面だけではなく、コミュニケーションの創造性を高めるプラスの側面もある。

こんな内容で始まった授業であるが、受講生の多くは自分のコミュニケーション能力に不安や不満を感じているから、授業を受けることで新しいコミュニケーションスキルを身につけたいという受講動機を持っていた。案外、真剣に自己紹介の課題に取り組んでいたのも、そういう受講動機と密接な関係がある。集中講義の感想には、「もっとディスコミュニケーションの具体例をあげて、その解決策を提示して欲しい」とか、「教員同士が異なる意見を闘わすのはやめて欲しい。教員として責任を持って、授業の落としどころを明らかにするべきだ」という批判も寄せられた。集中講義という短い期間では、受講生が持つディスコミュニケーションに対する否定的な観点、ディスコミュニケーションを解決すべき問題として捉え、その解決技法を知識・情報として手に入れたいというお手軽な欲望を変化させることは容易ではないということが、担当教員の間で確認された。一方受講生の中には「授

業を受けて、分かっていたつもりのコミュニケーションやディスコミュニケーションが、よく分からないものとして、分かってきた」という感想もあった。一見、否定的な感想にも思えるが、受講生がディスコミュニケーションについて自ら考え始める出発点に立ったという自覚を得たという意味で、評価できる。「よく分からない」と不満げな受講生と、「自分で考え始めた」と喜ぶ教員のディスコミュニケーションが明確だった。

〈うそ〉が聞こえない耳

2009年度の「ディスコミュニケーションの理論と実践」は、過去の授業スタイルを一変した。それまで複数の教員が協力して授業を分担していたのをやめ、受講生のグループワークを最優先するスタイルに変更した。また、複数の教員が授業を担当することで、ディスコミュニケーションについて多様な角度から考察していたが、統一感に欠けることもあって、テーマに対する考察が深まりにくい部分もあった。これを改めるために、一貫したテーマで授業を行うことにした。

オリエンテーションで、この授業の目的は「〈うそ〉が聞こえない耳（あるいは、真実の耳）」をテーマに、グループワークを行い、作品を制作することにあると告げた。成績評価には「〈うそ〉が聞こえない耳」をテーマにした個人作品も考慮に入れるとした。知識・情報提供型の授業ではないこと、受講生には主体的な授業参加が強く求められ、作品制作の過程で異なる意見との交渉も必要になることを強調した。グループ作品は、6名程度の小グループで協働して制作する。作品の種類（文学、美術、音楽、パフォーマンス、論文、映像、造形、なんでもあり）は自由だが、発表にあたって、およそ20分で伝えられるものとした。

グループワークの展開

「うそ」と「聞こえない」という二重のディスコミュニケーションが、どのような世界を切り開くのか。個々の受講生のイマジネーションと、グループワークの協働で発揮される創造性に賭けた授業である。作品を制作するグループが結成されるまでは、教員の話題提供とグループディスカッションの組み合わせの授業を4回行った。4回とも教員の話題提供は〈うそ〉に関するものである。〈うそ〉とは何か？　〈うそ〉はどのように生まれるか？　〈うそ〉の意味について考える授業を行った。グループが固定されてからは、教員の介入は最小限として、授業中に出席を取ることと、受講生から作品制作上で必要となる物品などの相談を受ける程度にとどめた。何も話さない、グループワークにも参加しない。ただ授業の間だけ、教室という場所を共にする教員に対して、受講生からは非難の声は上がらなかった。受講生は3つのグループに分かれて、自分たちのグループ作品制作のための話し合いに集中していった。担当教員のことも他のグループのことも気にならないくらい、自分たちのグループワークに熱中しているのが、側にいるだけで、その熱い気配が伝わってくるのだ。授業のたびに集めるコメントシートにも「だんだん面白くなってきました」「グループの話し合いがとても刺激的です」と、興奮にも似た感想が次第に多くなっていった。

授業の最終日、グループ作品の発表会が行われた。3つのグループ作品は、それぞれまったく違った視点と方法で「〈うそ〉が聞こえない耳」というテーマに切り込み、独自の作品世界を創りあげていた。教えることを主眼にした授業ではけっして得られない成果であった。信頼のディスコミュニケーションの成果ともいえる。

ぼくがナースとして働いていたときに、実践し、考えたことのある「しないケア」が、大学の授業でも生きていることに驚いた。コミュニケーションの途絶ではない「待つ」というかたちのディスコミュニケーションが、「育つ」ということを実現させる。

信頼のディスコミュニケーション

グループ作品制作を主眼とした2009年度の「ディスコミュニケーションの理論と実践」を修了しての、受講生の感想には、「こんなに自由な授業を受けられて、面白かった。制作の経過でグループ内に生ずる意見の対立や混乱を経験したが、自分にとって意味のある学びができた」という内容が多く見られた。担当教員へのお世辞もあるかもしれないが、むしろ自分たちの活動を誇る気持ちの方が強く感じられる。それにしても、教員の関与が非常に薄い授業に対する、受講生の満足度の高さは何に起因するのだろうか。ぼくなりの推論を試みたい。

テーマは教員から一方的に与えられ、変更は許されない頑固なものであった。異なる専門領域で学ぶ大学院生たちに、公開講座の受講生として社会人も混じりあったグループでは、ひとつのテーマを論ずる際の視点も、論拠となる知識経験も大きく異なる。議論を交わすだけでは、いつまでも結論や方針が固まらずにいるという不自由さを感じただろう。しばらく、みんなが黙り込んでしまっているという光景も時に見られた。メンバーの関心と能力には、それぞれベクトルの違いがあって、同じ物差しでは優劣を計ることはできない。競い合い優先順位を決めていくという方針決定は、異なる背景を持つメンバーの合意が得られにくい。自分の意見を出し終わった後で、通じ合えなさを感じながら、黙って人の話を聞くだけしかない。

この挫折感が個人の中にある場合には不自由さを感ずるだけなのだが、グループ全体に個の挫折感が共有されると、グループの話し合いは静かな調子を帯び始める。自分を出すことと、自分を引っ込めることのバランスがグループ全体の動きを実現するために要求されてくるからだ。話し合いというより黙り合いが引きおこされる。黙っているときは、自分のことよりもまわりに関心が移る。他に関心を寄せるものが集まれば、誰かのことばは皆に聴かれるものとして生まれてくるのだ。語る者は沈黙が自分のことばを迎えてくれることを知る。

自分にとって挫折であった沈黙が、自分を受け入れた沈黙のように他を受け入れる力能に満ちていることに気づいたとき、誰かと共にいて黙るということが、コミュニケーションの断絶ではなく、あらたなことばを生み出す互いの信頼の基礎になりうる。ずいぶんと回りくどい理屈になってしまったが、これは知的に理解できるというより、その場に居合わせた者同士が身をもって感じることがらなのだ。自分の思惑を越えたところにおもむく協働の過程には、信頼のディスコミュニケーションが生き生きと働きかけている。